
学習信条と学習効果

—BALLI を使用した調査—

佐 藤 敏 子

1. 目的

学習者の言語習得の速度や習熟度の違いはどこから発生するのであろうか。「学習者は自分の学習目標の達成に役立つと思われる認知的方略,あるいは学習方略を用いる」(辰野 1997)と言われているが,言語学習方略(以下「方略」を「ストラテジー」とする)使用に影響を与えているのが学習者の学習信条である(Horwitz 1987)。

本稿では Horwitz の Beliefs About Language Learning Inventory: BALLI に関する調査 (1988)⁽¹⁾ をもとに,日本での英語教育の現状を考慮した項目を加え,調査するものとする。既に佐藤・山名・中川 (2004) 及び佐藤 (2005) でもこの BALLI に関する調査は行っているが,集計方法において,学習者の「言語学習ストラテジー使用に影響を与えている学習信条」という観点が抜けていたために,その調査が「良い学習者」と「うまくいかない学習者」を区別する要素はどのような信条なのかを明らかにできなかった。今回の調査はその観点を加え,調査・集計を行う。

2. Horwitz の BALLI と実施上の質問項目

Horwitz は BALLI を以下の 5 つのカテゴリーに分類し,質問項目は 34 であった。

- (1) 学習の困難さ (The Difficulty of Language Learning)
- (2) 外国語学習の適性 (Foreign Language Aptitude)
- (3) 外国語学習の本質 (The Nature of Language Learning)
- (4) 学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー (Learning and Communication Strategies)
- (5) 動機と期待 (Motivations and Expectations)

本調査では以上の 5 つのカテゴリーに,

- (6) 学習者の自律 (Learner Autonomy)

を加え,質問項目数は 40 とした。調査は,質問項目に 4 段階 (1 – まったく思わない 2 – あまり思わない 3 – そう思うことがある 4 – その通りです) で回答させた。4 肢選択の意図は調査参加者に曖昧さを残さずに,確実に自分の考えを決定してもらうためである。

3. 調査対象

調査は4つの学習集団を対象として行う。

(1)グループA（参加者数14名）

茨城県下の4年制大学の2年生で、全員が長期または短期の海外語学研修の経験者である。ニュージーランドに1年間、アメリカ合衆国に3年間、英国に2年間、オーストラリアに2年間、カナダに1年間などの生活体験者が含まれる集団である。さらに調査参加者はすべて英語科教員免許取得希望者である。

(2)グループB（参加者数50名）

埼玉県下の4年制大学の3年生で、英語を専門としている学習集団である。大学の語学プログラムなどを利用して、語学力伸長のために努力をしている。取得資格は英検で準2級から2級程度である。全員が英語科教員免許取得希望者である。

(3)グループC（参加者数25名）

茨城県下の4年制大学の1年生で、英語を専門としない学習集団である。入学時のプレイスメントテストでは英検準2級1名、3級8名、4級16名という英語力の学習集団である。

(4)グループD（参加者数28名）

茨城県下の4年制大学の1年生で、英語を専門としない学習集団で、入学時のプレイスメントテストは全員4級未満（5級相当）である。

4. 調査時期

グループAは2005年5月下旬、グループB、C、Dは2005年4月下旬に、それぞれの授業が開始するときに調査を実施した。

5. 調査結果とその考察

(1) 学習の困難さ

表1より以下のようなことが言える。

①項目3「英語は難しい言語だ」と項目35「英語学習は難しい」

今回の調査対象の学年がAは2年生、Bは3年生、C・Dは大学に入学したての1年生だという条件が、結果に反映しているのが、項目3である。2・3年生は既に第2外国語を履修し、英語と他の外国語の比較ができる状態である。それに対して、C・Dは外国語学習の体験は英語のみである、という中で、C・Dの90%を超える参加者がこの項目に肯定的であるというのは理解できる。また項目35「英語学習は難しい」はB・C・Dは90%を超える肯定的な回答、B・C・Dに比べると少なめではあるがAも64%の肯定的な回答である。どのグループも英語学習の大変さを感じている。

表1 学習の困難さ

| | 4 | 3 | 2 | 1 |
|---------------------------------------|----|----|----|----|
| ----- | | | | |
| 3. 英語は難しい言語だ。(数字は%) | | | | |
| A | 7 | 43 | 43 | 7 |
| B | 18 | 50 | 28 | 4 |
| C | 56 | 40 | 4 | 0 |
| D | 54 | 39 | 7 | 0 |
| 5. 将来英語がうまく話せるようになると思う。 | | | | |
| A | 21 | 50 | 21 | 7 |
| B | 12 | 38 | 48 | 2 |
| C | 16 | 12 | 60 | 12 |
| D | 0 | 18 | 36 | 46 |
| 25. 英語は、読んだり、聞いたりするよりも、話すことの方が簡単である。 | | | | |
| A | 7 | 14 | 43 | 36 |
| B | 4 | 18 | 48 | 30 |
| C | 8 | 20 | 48 | 24 |
| D | 0 | 21 | 46 | 32 |
| 35. 英語学習は難しい。 | | | | |
| A | 21 | 43 | 36 | 0 |
| B | 24 | 68 | 8 | 0 |
| C | 56 | 40 | 0 | 4 |
| D | 71 | 21 | 4 | 4 |
| 38. 英語は話したり聞いたりするより、読んだり書いたりする方がやさしい。 | | | | |
| A | 7 | 57 | 29 | 7 |
| B | 22 | 52 | 22 | 4 |
| C | 12 | 44 | 44 | 0 |
| D | 21 | 50 | 18 | 11 |

②項目5「将来英語がうまく話せるようになると思う」

4つの集団を英語習熟度で考えると、上位よりA→B→C→Dという順番になる。この習熟度が影響する項目、すなわち、「良い学習者」と「うまくいかない学習者」とを分ける学習信条としてあげられるのは、項目5である。Aの71%、Bの50%は肯定的であるが、Cは72%、Dは82%が否定的である^②。

③項目25「英語は、読んだり、聞いたりするよりも、話すことの方が簡単である」、項目38「英語は話したり聞いたりするより、読んだり書いたりする方がやさしい」

Aの集団は、上記のように、海外生活体験者も含む本来なら「話すこと」の得意な集団であると言える。しかしそのような集団であっても「話すこと」の難しさを感じているのが79%であり、「読んだり書いたりする方がやさしい」と思う回答が64%である。

コミュニケーション・アプローチの展開例として土屋・広野(2000)は以下の3段階の指導を提示している。

(1)内容と形式の理解

(2)制限された範囲での練習と言語活動

(3)実践的コミュニケーション場面での応用的活動

現在の日本の英語教育で、この3段階目の活動を授業の中で取り入れている授業例がどれほどあるであろうか。日本の「外国語としての英語 (EFL)」の環境の中での英語教育の限界を感じさせる回答結果である。

(2) 外国語学習の適性

表2より、以下のような考察ができる。

①項目1「外国語を学ぶのは、大人より子供の方が簡単である」と項目6「日本人は英語を学ぶのが上手だ」

項目1は「小学校に英語の導入」など英語教育の最近の報道などからの影響も考えられるが、A (93%) B (90%) C (84%) D (82%) と、どのグループも肯定的な回答である。この傾向は項目6についても「日本人の英語下手」が頻繁に報道されているため、どの群も否定的な回答、A・B・C・Dそれぞれ85%, 98%, 92%, 89%となっている。4群の差はほとんどないと言える。

②項目2「外国語を学ぶのに特別な才能を持っている人がいる」、項目16「私は英語学習に適した能力を持っている」と項目36「誰でも英語は話せるようになる」

項目2についてはどの群も肯定的・否定的の回答が相半ばになっている。項目16に関してはBの傾向が他の群と大きく異なっている。Bの肯定的回答、すなわち学習適性を持ち合わせているという回答が40%あるのに対してA・C・Dそれぞれ14%, 4%, 7%と否定的である。Bの学習適性の肯定的態度から項目36に対しても肯定的回答は出てくるが (80%), D群の肯定・否定回答が50%ずつなのは興味深い。

Dの英語学力に関しては「3. 調査対象」の項で説明したように、入学時のプレイスメントテストの結果は英検で5級相当である。これは中学1年生終了時の学力に相当する。彼らが6年間の英語学習歴を振り返っても、「誰でも英語は話せるようになる」とは考えにくい。しかし50%の学習者が「いつかは話せるようになる」という希望を持っていることに対して、英語教員は教材の選択・配列、学習環境の整備 (CALL など) を検討し、彼らの「希望」に答える必要がある。

③項目12「数学や理科が得意な人は英語の学習は得意でない」と項目32「外国語ができる人は頭が良い」

Horwitz の BALLI を参考にして今回の項目を作成したが、日本の教育の現実になじまない項目がこの項目である。Horwitz 自身は「理系」「文系」という分け方で“People who are good at math and science are not good at learning foreign languages.”と項目立てし、これを common wisdom としている。しかし日本の教育環境の中で、学習を「理系」「文系」の2つの分類し、「外国語学習」を「文系」の学習の中に入れるのは現実には合わない。大学の学部構成でも外国語は文学部から独立させ外国語学部を設立させている現状を考えると、回答者が外国語学習を「理系」「文系」の枠で考えるとは思えない。当然のことながらA・B・C・Dそれぞれ100%, 98%, 88%, 75%が否定している^③。

表 2 外国語学習の適性

| | 4 | 3 | 2 | 1 |
|------------------------------|----|----|----|----|
| ----- | | | | |
| 1. 外国語を学ぶのは、大人より子供の方が簡単である。 | | | | |
| A | 29 | 64 | 7 | 0 |
| B | 38 | 52 | 10 | 0 |
| C | 24 | 60 | 16 | 0 |
| D | 29 | 43 | 21 | 7 |
| 2. 外国語を学ぶのに特別な才能を持っている人がある。 | | | | |
| A | 7 | 43 | 36 | 14 |
| B | 8 | 44 | 34 | 14 |
| C | 8 | 48 | 44 | 0 |
| D | 7 | 50 | 36 | 7 |
| 6. 日本人は英語を学ぶのが上手だ。 | | | | |
| A | 0 | 14 | 64 | 21 |
| B | 0 | 2 | 70 | 28 |
| C | 0 | 8 | 72 | 20 |
| D | 0 | 11 | 71 | 18 |
| 12. 数学や理科が得意な人は英語の学習は得意ではない。 | | | | |
| A | 0 | 0 | 36 | 64 |
| B | 0 | 8 | 40 | 52 |
| C | 0 | 12 | 56 | 32 |
| D | 11 | 14 | 36 | 39 |
| 16. 私は英語学習に適した能力を持っている。 | | | | |
| A | 0 | 14 | 79 | 7 |
| B | 0 | 40 | 52 | 8 |
| C | 0 | 4 | 40 | 56 |
| D | 0 | 7 | 25 | 68 |
| 32. 外国語ができる人は頭が良い。 | | | | |
| A | 0 | 14 | 64 | 21 |
| B | 12 | 30 | 50 | 8 |
| C | 36 | 32 | 32 | 0 |
| D | 21 | 36 | 39 | 4 |
| 36. 誰でも英語は話せるようになる。 | | | | |
| A | 43 | 36 | 21 | 0 |
| B | 46 | 34 | 20 | 0 |
| C | 4 | 64 | 24 | 8 |
| D | 18 | 32 | 32 | 18 |

項目32に関しては Horwitz の調査では「どちらともいえない」という項目を設定したため、41%から50%の回答がここにあり、判断しかねるが、本調査ではA (14%) B (42%) C (68%) D (57%) という回答が得られ、A群の否定的な回答が目立つ。この項目は学習結果と自己評価という点で注目する項目である。

(3) 外国語学習の本質

表3から明かなように、このカテゴリーの質問項目では学習者の学習習熟度により違いの見える項目が多く存在する。

①項目4「英語の背景にある文化について学びたい」、項目8「英語を話すのには英語圏の文化を知る必要がある」と項目14「英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる」

Horwitzはこの項目群を“the role of cultural contact”と呼び、項目8に関する質問をしている。本調査ではそれに、4、14を加え、英語学習と文化的背景の関心度を調査した。

項目4では、A・B群とC・D群との差がはっきりとし、それぞれ肯定的態度が86%、82%と44%、28%という結果である。学習習熟度と文化的関心度が一致する項目である。

項目8では項目4ほどではないが、否定的態度の割合を見るとD群の多さ(42%)が際立っている。

項目14はA群とB・C・D群の間に差があり、A群の外国生活体験者の数と関係が深い。

以上より、この4、8、14に関して外国語学習の習熟度と文化的関心の高さとの関連は高く、英語指導者は教材選択の際に考慮する必要のある項目であると考ええる。

②項目11「効果的な授業のためには授業中日本語を使わない方がよい」、項目13「英語の勉強はアメリカやイギリスなどで勉強するのがよい」、項目30「英語を学ぶときは、外国人に習うの

表3 外国語学習の本質

| | 4 | 3 | 2 | 1 |
|---------------------------------|----|----|----|----|
| ----- | | | | |
| 4. 英語の背景にある文化について学びたい。 | | | | |
| A | 36 | 50 | 14 | 0 |
| B | 38 | 44 | 18 | 0 |
| C | 8 | 36 | 48 | 8 |
| D | 7 | 21 | 50 | 21 |
| 8. 英語を話すのには英語圏の文化を知る必要がある。 | | | | |
| A | 14 | 79 | 7 | 0 |
| B | 42 | 40 | 18 | 0 |
| C | 12 | 52 | 36 | 0 |
| D | 4 | 54 | 36 | 6 |
| 11. 効果的な授業のためには授業中日本語を使わない方がよい。 | | | | |
| A | 0 | 29 | 71 | 0 |
| B | 16 | 46 | 38 | 0 |
| C | 0 | 12 | 60 | 28 |
| D | 18 | 18 | 32 | 32 |
| 13. 英語の勉強はアメリカやイギリスなどで勉強するのがよい。 | | | | |
| A | 0 | 50 | 43 | 7 |
| B | 24 | 62 | 10 | 4 |
| C | 12 | 44 | 40 | 4 |
| D | 18 | 50 | 25 | 7 |

14. 英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 43 | 50 | 7 | 0 |
| B | 6 | 40 | 42 | 12 |
| C | 4 | 20 | 64 | 12 |
| D | 4 | 29 | 43 | 25 |
19. 英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 0 | 43 | 57 | 0 |
| B | 6 | 44 | 36 | 14 |
| C | 36 | 60 | 4 | 0 |
| D | 39 | 29 | 21 | 11 |
22. 英語の学習で最も重要なのは文法である。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 0 | 36 | 64 | 0 |
| B | 6 | 28 | 50 | 16 |
| C | 16 | 60 | 24 | 0 |
| D | 39 | 39 | 18 | 4 |
27. 外国語を学ぶということは他の学問を学ぶこととは異なる。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 14 | 71 | 14 | 0 |
| B | 10 | 40 | 38 | 12 |
| C | 8 | 20 | 68 | 4 |
| D | 14 | 43 | 29 | 14 |
28. 英語学習で最も重要なのは日本語から英文にする方法を学習することである。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 0 | 7 | 57 | 36 |
| B | 4 | 8 | 60 | 28 |
| C | 4 | 56 | 40 | 0 |
| D | 11 | 57 | 32 | 0 |
29. 教科書がないと英語は勉強できない。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 0 | 14 | 36 | 50 |
| B | 0 | 8 | 56 | 36 |
| C | 24 | 32 | 40 | 4 |
| D | 29 | 39 | 14 | 18 |
30. 英語を学ぶときは、外国人に習うのが一番良い。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 7 | 64 | 29 | 0 |
| B | 30 | 50 | 18 | 2 |
| C | 16 | 48 | 36 | 0 |
| D | 21 | 36 | 32 | 11 |
37. 日本人の先生より、外国人に英語は習いたい。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 0 | 64 | 36 | 0 |
| B | 28 | 56 | 12 | 4 |
| C | 0 | 32 | 52 | 16 |
| D | 7 | 18 | 64 | 11 |
39. 日本人同士で、英語で会話をするのは無駄だ。
- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| A | 0 | 14 | 36 | 50 |
| B | 4 | 22 | 50 | 24 |
| C | 0 | 28 | 44 | 28 |
| D | 21 | 18 | 43 | 18 |

「がいちばんよい」と項目37「日本人の先生より、外国人に英語は習いたい」

Horwitz は “language immersion in language achievement” と呼び、13にあたる質問をしている。今回の調査では、授業中の immersion の観点で、授業形態と指導者に関する11, 30, 37を加えた。

「英語の授業は英語で」という文部科学省⁴⁾の方針にもかかわらず、学習者は immersion の効果は実感および推測できていない。項目11ではA C D群では「英語で展開される授業」に否定的である。唯一B群のみが肯定的な意見が半数を超えた (62%)。ただ項目13のような海外研修に対してはA群 (肯定と否定回答が50%ずつ) 以外では肯定的で、B・C・Dそれぞれ86%, 56%, 68%で、「外国で勉強する」ことに対する期待感があるのであろう。

項目30, 37については「そうすればよいのだが」「そうしたくはない」という回答である。特に37についてはC Dの群では外国人の先生の指導に対して、否定的である。この項目は学習習熟度の観点で、大きな違いの見られる項目で、BALLI と学習ストラテジー使用との関連を議論する必要のある項目である。

③項目27「外国語を学ぶということは他の学問を学ぶこととは異なる」

この項目の特徴はA群が際立って肯定的な回答をしていることである (85%)。Horwitz の調査でも “Learning a foreign language is different from learning other school subjects.” という質問で76%から86%の肯定的な回答が得られている。この回答の背景は今後の研究を待ちたい。

④項目19「英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである」、項目22「英語の学習で最も重要なのは文法である」、項目28「英語学習で最も重要なのは日本語から英文にする方法を学習することである」、項目29「教科書がないと英語は勉強ができない」と項目39「日本人同士で、英語で会話をするのは無駄だ」

今回の調査で一番興味深い回答が得られたのはこの5項目である。

項目19に関してはA・B群は否定的な回答が多く、C・D群は肯定的な回答が多い。さらに項目22に関しては英語学習と文法との関連を学習者がどのように考えているかという質問である。EFLの観点からは文法学習は重要であるのは当然であるが、回答者が受けて来た教育内容と大きくかわっているように思える。文法学習の重要性は英語の習熟度が低いほど、肯定的な態度であると言える。同じような傾向にあるのが項目28の英作文の学習である。Horwitz も “a preoccupation with translation likely to distract students from their most important learning task” (避けたい学習方法) と言っているが、習熟度が下がれば下がるほどこの学習法を支持している結果が出ている。

項目29に関しては「英語の教材」が「教科書」だけの教育を受けて来たのか、それ以外の教材を指導者が授業中に使って指導をして来たのか、教育内容と大きくかわる項目である。それが学習習熟度とかわる結果が生まれるのではないかという判断もできる。

項目39に関しては学習者同士のコミュニケーション活動を多く設定することに対して、多くの支持が得られるという結果だと読める。今後の大学英語教育を考えると、示唆に富んだ回答結果である。

(4) 学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー

このカテゴリーの質問項目は主に「実際に学習者がどのような形態で学習（練習）をしているか」という質問である。

- ①項目10「宿題は必要である」、項目20「何度も繰り返し練習するのは大切である」と項目26「カセットテープやCDを使って練習するのは大切である」

この3項目は学習ストラテジーに関する質問であるが、学習習熟度とかかわるのは項目10の宿題に関する項目である。C・Dの群は肯定的な回答が36%、46%という結果であるが、A・Bは86%、68%の肯定率である。外国語学習にとって復習は欠くことのできない要素であるが、それを「宿題」という形で実施している（してきた）A・B群と、復習をやらないC・D群の習熟度の差は明らかである。

- ②項目7「英語を正しい発音で話すことは大切だ」と項目34「私は外国人と友達になりたい」

この2項目はコミュニケーション・ストラテジーに関する質問である。コミュニケーションを重視した活動の中では、指導者は「発音の指導」にあまり時間を割かないのが、最近の傾向である。

表4 学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー

| | 4 | 3 | 2 | 1 |
|--------------------------------|----|----|----|----|
| ----- | | | | |
| 7. 英語を正しい発音で話すことは大切だ。 | | | | |
| A | 43 | 36 | 14 | 7 |
| B | 58 | 36 | 6 | 0 |
| C | 56 | 44 | 0 | 0 |
| D | 57 | 32 | 7 | 4 |
| 10. 宿題は必要である。 | | | | |
| A | 7 | 79 | 14 | 0 |
| B | 16 | 52 | 32 | 0 |
| C | 12 | 24 | 48 | 16 |
| D | 7 | 39 | 43 | 11 |
| 20. 何度も繰り返し練習するのは大切である。 | | | | |
| A | 64 | 36 | 0 | 0 |
| B | 82 | 18 | 0 | 0 |
| C | 64 | 36 | 0 | 0 |
| D | 61 | 29 | 7 | 4 |
| 26. カセットテープやCDを使って練習するのは大切である。 | | | | |
| A | 43 | 50 | 7 | 0 |
| B | 48 | 44 | 8 | 0 |
| C | 28 | 48 | 20 | 4 |
| D | 25 | 50 | 21 | 4 |
| 34. 私は外国人と友達になりたい。 | | | | |
| A | 64 | 36 | 0 | 0 |
| B | 70 | 26 | 4 | 0 |
| C | 20 | 48 | 28 | 4 |
| D | 11 | 39 | 32 | 18 |

しかし学習者自身はすべての群で、この大切さを支持している。

それに対して項目34は英語習熟度を示す項目である。A→B→C→Dの順に肯定的な回答の率が低くなっていく(100%, 96%, 68%, 50%)。D群も半分の学習者が肯定しているので、決して少ない数字ではないがA群の100%と比べると、強い志向が「学習効果」と大いに関係があるように思われる。

(5) 動機と期待

現在、多くの大学生が英語の資格を取るために努力をし、そして必ずしも学習効果があがる環境で学習をしている訳ではない、という現実を考えれば、「英語ができる」ことが大学卒業後の良い生活につながるという、肯定的な考え方で、さらに「英語が上手になりたい」という希望を多数の大学生が持っていて不思議ではない。しかし Horwitz の指摘にあるように、「外国語学習は難しい」し、大変なので、「勉強しなくて済む環境になればすぐやめてしまう」という現実も一方では存在している。

2つの項目については、どの群も同じような傾向の回答(肯定回答が85%から100%)であったが、A・B群の good speaker になりたいという強い希望が学習を進めさせ、効果も上がる、という結果を生むのである。

(6) 学習者の自律

Horwitz の BALLI に加えて6番目のカテゴリーとして「学習者の自律」に関して調査をした。「自律」とはここでは「学習の管理責任を負う能力」とであるという定義に従い、「自学」ではなく「教師の指導下にあっても、自分の学習への責任を負える能力」と考える。

①項目9「最も効果的な学習方法は先生がよく知っている」と項目17「たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスに従う」

この項目は学習方法を決めるとき、誰が主導するか、ということを知っているが両項目とも「先

表5 動機と期待

| | 4 | 3 | 2 | 1 |
|--------------------------|-----|----|----|----|
| ----- | | | | |
| 31. 英語ができれば良い仕事のチャンスがある。 | | | | |
| A | 36 | 57 | 7 | 0 |
| B | 50 | 48 | 2 | 0 |
| C | 32 | 52 | 12 | 4 |
| D | 43 | 46 | 11 | 0 |
| 33. 私は英語が上手に話せるようになりたい。 | | | | |
| A | 100 | 0 | 0 | 0 |
| B | 92 | 8 | 0 | 0 |
| C | 40 | 56 | 4 | 0 |
| D | 46 | 39 | 4 | 11 |

表 6 学習者の自律

| | 4 | 3 | 2 | 1 |
|-----------------------------------|----|----|----|----|
| ----- | | | | |
| 9. 最も効果的な学習方法は先生がよく知っている。 | | | | |
| A | 0 | 57 | 43 | 0 |
| B | 6 | 44 | 44 | 6 |
| C | 12 | 56 | 32 | 0 |
| D | 11 | 39 | 32 | 18 |
| 15. 自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的ではない。 | | | | |
| A | 0 | 7 | 71 | 21 |
| B | 2 | 12 | 72 | 14 |
| C | 16 | 16 | 64 | 4 |
| D | 14 | 25 | 54 | 7 |
| 17. たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスに従う。 | | | | |
| A | 0 | 79 | 21 | 0 |
| B | 4 | 62 | 32 | 2 |
| C | 28 | 44 | 24 | 4 |
| D | 14 | 43 | 39 | 4 |
| 18. 指導者がいないと、英語の学習はできない。 | | | | |
| A | 0 | 36 | 36 | 29 |
| B | 10 | 14 | 64 | 12 |
| C | 36 | 40 | 20 | 4 |
| D | 32 | 36 | 21 | 11 |
| 21. 授業を管理するのは、先生である。 | | | | |
| A | 14 | 50 | 36 | 0 |
| B | 20 | 58 | 20 | 2 |
| C | 16 | 68 | 16 | 0 |
| D | 25 | 50 | 25 | 0 |
| 23. 私が英語学習で進歩がなかったら、先生に責任がある。 | | | | |
| A | 0 | 7 | 57 | 36 |
| B | 0 | 12 | 48 | 40 |
| C | 0 | 8 | 64 | 28 |
| D | 0 | 7 | 54 | 39 |
| 24. 学生の評価は先生によってされるべきである。 | | | | |
| A | 0 | 36 | 50 | 14 |
| B | 8 | 40 | 40 | 12 |
| C | 4 | 48 | 48 | 0 |
| D | 4 | 46 | 36 | 14 |
| 40. 授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方が良い。 | | | | |
| A | 0 | 29 | 57 | 14 |
| B | 4 | 44 | 46 | 6 |
| C | 0 | 60 | 32 | 8 |
| D | 11 | 46 | 36 | 7 |

生主導である」という回答である。ここで目を引く回答としては（わずかな差ではあるが）、D群の先生離れの傾向である。項目9では肯定・否定が半数ずつで、項目17では先生のアドバイスに従わないものが43%いる。

②項目15「自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的でない」と項目40「授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方が良い」

学ぶ対象を決める自律とその目標に向かって活動をする自律に関する質問項目である。項目15の対象を決める自律に関してはA・B群とC・D群間に差がある。また項目40、アプローチに関する自律についてはA群とB・C・D群とに差が見られる。ここで早計には結論は出せないが、「学習対象に関する自律」と「目的に向かうときの自律」間には習熟度に関与する程度の違いがあるのではないか、という推論が今回の調査では見られる。この件に関しても今後の研究に残される。

③項目18「指導者がいないと、英語の学習はできない」、項目21「授業を管理するのは、先生である」、項目23「私が英語学習で進歩がなかったら、先生に責任がある」と項目24「学生の評価は先生によってされるべきである」

この項目は「学習者の学習責任は指導者にある」という従来の考え方に対して、学習者はどのように考え、その考え方の違いには習熟度は関係するのか、ということを用意した設問である。

項目18では A・B群とC・D群間には「指導者」に対する必要性が異なり、習熟度の高いA・Bでは65%、76%の学習者は否定的回答で、C・Dでは76%、68%が指導者の必要性を感じている。また項目21の授業管理では4群の差は見られず、24の成績評価でも4群差はなく、肯定・否定ともに50%前後の回答である。

最後に項目23に関しては「自分の学習に責任を負う」という自律に関する質問である。学習結果の責任は自分にある、という4群ともにほとんど差のない回答で、今回の調査対象の117名についてはある程度の学習の自律は認められる、という結果である。

6. 結論

今回の調査で BALLI が学習習熟度に影響を及ぼしていると考えられる項目をカテゴリー別に挙げる。

「学習の困難さ」

- ・将来英語がうまく話せるようになると思う。

「外国語学習の適性」

- ・外国語ができる人は頭が良い。

「外国語学習の本質」

- ・英語の背景にある文化について学びたい。

- ・英語を話すには英語圏の文化を知る必要がある。
- ・英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。
- ・英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。
- ・英語の学習で最も重要なのは文法である。
- ・外国語を学ということは他の学問を学ぶこととは異なる。
- ・英語学習で最も重要なのは日本語から英文にする方法を学習することである。
- ・教科書がないと英語は勉強できない。
- ・日本人の先生より、外国人に英語は習いたい。

「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー」

- ・宿題は必要である。
- ・私は外国人と友達になりたい。

「動機と期待」

習熟度に影響を及ぼしている項目はない。

「学習者の自律」

- ・自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的ではない。
- ・指導者がいないと、英語の学習はできない。
- ・授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方が良い。

本稿では学習信条と学習者の習熟度との関係を明らかにしてきたが、今後その信条と学習ストラテジーとの関係を明らかにしていかななくてはならない。竹内（2003）はこのストラテジーを「外国語学習の際に学習者がとる方法・行動などの中で、ある学習段階において、特定の活動に単独にあるいは組み合わせで利用されると、活動の遂行や対象言語の習得が容易になったり、効果的になったりする可能性を持ったもので、学習者によって意識化できるものをいう」という定義をしている。今回調査で明らかになった習熟度の高い学習者の学習信条が、どのようなストラテジーと結びついているのかが今後の研究テーマとなる。

（さとう・としこ 産業情報学科）

（注）

- (1)この調査はテキサス大学でドイツ語（80人）、フランス語（63人）、スペイン語（98人）の外国語を学ぶアメリカ人学習者を対象に、セメスターの最初の3週間を使って行われた調査である。
- (2) Horwitz の BALLI ではこの項目に関連して、If someone spent one hour a day learning a language, how long would it take him/her to become fluent? という項目を設定しているが、上記(1)より、調査対象が「ドイツ語・フランス語・スペイン語」の初心者なので、この項目の存在理

由があるが、本調査では、既に中・高で6年間の英語教育を受けて来た学習者には不適當だと考えて、削除した。

- (3) Horwitz の作成した項目の中で質問すべきではない項目に “Women are better than men at learning foreign languages.” (Foreign Language Aptitude) がある。現代的な観点から、性差の問題をここで問うても何の解決にもならないと考え、削除した。
- (4) 文部科学省 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」 (2003)

参考文献

- ARCLE 編集委員会 2005. 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み』 リーベル出版
- Horwitz, E. K. 1987. “Surveying Student Beliefs About Language Learning” *Learner Strategies in Language Learning*, 119-129. Prentice Hall.
- Horwitz, E. K. 1988. “The Beliefs about Language Learning of Beginning University Foreign Language Students” *The Modern Language Journal*, 72, 283-294.
- JACET SLA 研究会編 2005. 『文献から見る第二言語習得研究』 開拓社
- 文部科学省 2003. 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」
- 佐藤敏子・山名豊美・中川武 2004. 「ポートフォリオ学習における学習者の変容」『つくば国際大
学研究紀要』 vol. 10, 31-48.
- 佐藤敏子 2005. 「リメディアル教育の実践」『つくば国際大研究紀要』 vol. 11, 11-23.
- 竹内理 2003. 『より良い外国語学習法を求めて』 松柏社
- 高梨庸雄 2005. 『英語の「授業力」を高めるために』 三省堂
- 辰野千壽 1977. 『学習方略の心理学—賢い学習者の育て方—』 図書文化社
- 土屋澄男・広野威志 2000. 『新英語科教育法入門』 研究社
- 山梨正明 2004. 『ことばの認知空間』 開拓社
- 英語能力判断テスト (C) 日本英語検定協会

“The Beliefs about Language Learning and the Students’ Use of Effective Language Learning Strategies”

Toshiko Sato

The purpose of this paper is to elicit some differences between successful learners and unsuccessful ones about the Beliefs About Language Learning Inventory (BALLI). Student beliefs about language learning can influence their language learning strategies. Therefore, knowledge of student beliefs is crucial for exploring language learning strategies. Horwitz’s BALLI contains thirty-four items in five areas: 1) difficulty of language learning; 2) foreign language aptitude; 3) nature of language learning; 4) learning and communication strategies; 5) motivations and expectations. But in my paper six categories (the sixth one is ‘learner autonomy’) and forty items are developed.

This paper reports a descriptive study of the beliefs of four groups studying English at universities. The data indicate some differences among the four groups:

(1) the difficulty of language learning

- (a) I believe that I will learn to speak English very well.

(2) foreign language aptitude

- (a) People who is good at a foreign language are very intelligent.

(3) the nature of language learning

- (a) I’d like to learn about the culture of the people speaking English.
- (b) It is necessary to know the foreign culture in order to speak the foreign language.
- (c) Learning English comes to understanding the Japanese culture very well.
- (d) Learning English is mostly a matter of learning a lot of new vocabulary words.
- (e) Learning English is mostly a matter of learning a lot of grammar rules.
- (f) Learning English is different from learning other school subjects.
- (g) Learning English is mostly a matter of translating Japanese into English.
- (h) Using a textbook is necessary for learning English.
- (i) I’d like to learn English from native speakers.

(4) learning and communication strategies

- (a) Homework (assignment) is necessary.
- (b) I’d like to be friends with foreigners.

(5) motivations and expectations

No items can distinguish between successful and unsuccessful learners.

(6) learner autonomy

- (a) It is not effective that learners plan their studying programs.
- (b) I can't study English without teachers.
- (c) It is better that learners do the same activities in the same class.

Key Word: belief, BALLI, language learning strategy, successful learner

要約

本稿の目的は、Horwitz の作成した学習信条に関する調査項目を日本の学生に適した形に修正し、その調査結果から、習熟度の高い学生と低い学生との差を示す項目を明らかにすることである。学習信条は、学習者の言語学習ストラテジー使用に大きくかわり、学習効果を上げるために指導者として学習指導に際して考慮しなくてはならない点である。今回の調査で明らかになった学習者間の差異は以下のカテゴリー、および項目である。

(1) 学習の困難さ

- ・将来英語がうまく話せるようになると思う。

(2) 外国語学習の適性

- ・外国語ができる人は頭が良い。

(3) 外国語学習の本質

- ・英語の背景にある文化について学びたい。
- ・英語を話すには英語圏の文化を知る必要がある。
- ・英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。
- ・英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。
- ・英語の学習で最も重要なのは文法である。
- ・外国語を学ということは他の学問を学ぶこととは異なる。
- ・英語学習で最も重要なのは日本語から英文にする方法を学習することである。
- ・教科書がないと英語は勉強できない。
- ・日本人の先生より、外国人に英語は習いたい。

(4) 学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー

- ・宿題は必要である。
- ・私は外国人と友達になりたい。

(5) 動機と期待

習熟度に影響を及ぼしている項目はない。

(6) 学習者の自律

- ・自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的ではない。
- ・指導者がいないと、英語の学習はできない。
- ・授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方が良い。

キーワード： 信条 BALLI ストラテジー 習熟度